

# 張商英の護法論とその背景

安 藤 智 信

## 一

『護法論』<sup>①</sup>は宋代の居士張無尽（名は商英、字は天覺<sup>②</sup> 43～1121）の撰述であるというのが一般の通説である。

ただ陳垣氏が曾つて、その書『中国仏教史籍概論』に於て、南宋理宗朝（1224～1264）に活躍した文人、俞文豹の

洪覺範假張無尽名、作護法論以排儒<sup>（外集錄）</sup>

という記事をとり挙げて、『護法論』の撰述者が誰であるか疑問であるとしている。<sup>③</sup>そこで本稿は『護法論』の著者が誰かその撰述年時を政治・思想的背景のをかて追究し、更になぜ『護法論』が書かれるに至ったか、そして本論が中国仏教思想史上に及ぼした影響などを考えてみるものである。

## 二

『護法論』の主張するところは、韓愈（768～824）の「論仏骨表」（朱文公校昌黎先生文集卷三九）や歐陽脩（1007～1072）の「本論」（歐陽文忠公集卷十七）の排仏論に対し、外来宗教たる仏教が決して中国文化と相い容れぬものでなく、中国人の文化や思想に裨益する処、極めて甚大なものがあり、むしろ儒教・仏教・道教の三教は鼎立すべきで、そのいずれをも欠くことはできぬと云い、仏教の真精神を充分理解せずして、徒に排斥することは不当であると反論する。当時流行していた韓愈や歐陽脩などの儒学者の議論に対して、該博なる典拠を示して反論を加えており、そこに『護法論』の著者が仏教に対して

如何に深い造詣を有していたか、且つまた仏教擁護の熱情が諄々とした論証の上に看取できるのである。

三武一宗の法難が顯著に示す如く、宮廷に於ける仏道二教の先後鬭争や、儒教倫理および中華思想と外来宗教たる仏教の方外主義との対立から生じた論争の歴史は久しい間くりかえされてきた。そして仏教は儒道二教の圧迫と論難に対して根強く耐え続けた。その最たるものは三武一宗の法難のなかで、もつとも苛烈を極めた唐の武宗の廃仏である。これは仏教にとつて重大な試煉であつた。徹底した仏寺像塔の破壊、經典の焚棄、僧尼の還俗など、国家權力の発動が行われたにもかかわらず、すでに中国社会の土壤に根を張つていた仏教を根絶することはできず、かえつてその反動として宋代に及んで仏教が益々中国文化和融合した形跡さえある。禅と浄土教の繁榮がそれを顯著に示している。ことに近世中国思想史上特筆大書さるべき新儒教運動、すなわち宋学の形成の上に仏教思想が果たした役割が大きかつたという事實は、何よりもよくその間の経緯を物語つてゐる。

『護法論』の論述には従来の三教論争において云い古された論議の蒸し返しも多いが、近世の時代性を如実に示す新しい主張も多数みとめられる。その代表的な二三

の点を紹介するとしよう。

第一には、多数の僧のなかに墮落したものも可成りあるが、それだからといつて直ちに僧伽の全体の存在意義を否定することは不当である。墮落した僧に対して嚴罰を以て臨むべきであるという。これはまことに公正にして、建設的な意見であると云わねばならない。

第二には仏教と在家道との一致を説いた点である。著者は『維摩經』が説く煩惱即菩提の教説を敷衍して、在家菩薩、了事凡天という。すなわち在家仏教こそ大乘仏教の真面目であるとする。そして僧が方外の名の下に農耕や生産に従事しないで安逸をむさぼつてゐるという論難に対しては、当時の禪宗に於て盛に行われた作務の例を挙げ、これこそ仏教々団の正しいあり方であると指示している。これも僧侶の生活形式のみにとられた談論を強く排し、大乘仏教の理想が『維摩經』の示す居士仏教に於てこそ實現されるとする著者の主張によるものである。こういうところに方外的・形式的仏教から方内的・實質的仏教への大転換をみとめうる。宋代の居士仏教と結社仏教の擡頭が何よりもそれを明白に物語るものである。かくて『護法論』の主張はきわめて公平にして冷静な立場から、仏教擁護の論を行つてゐるのである。

右に『護法論』の内容を簡単に紹介した。次に『護法論』の撰述者について考えてみよう。

慧洪覺範が張無尽の名を仮りて、『護法論』を作つたと主張する俞文豹なる人の伝記は詳かではない。しかし彼は数々の文章を残しており、それらより、彼の思想を知ることができる。その著書の一である『唾玉集』によると、次のような注目すべき記載がある。すなわち「無仏論」という項に

張商英字天覺号無尽、常見梵冊整齊、嘆吾儒之不若、夜執筆、妻向氏問何作、曰欲作無仏論、向曰既曰無又何論、公駭其言而止、後閱藏經、悚然有悟、乃作護法論と云つてゐる。ここでは明かに『護法論』は張商英の撰述としてゐる。けれどもこれは、初めに紹介した『吹劍錄外集』の記載と全く矛盾することになる。われわれはこれを如何に理解したらよいか。『四庫提要』では彼の三書を説明している<sup>⑨</sup>。それによると俞文豹は議論を好んだが、謬説偏駁が多いという。上述の『護法論』に関する俞文豹の二つの記述の上にも、そのことは明かにみとめられるといわなければならない。このように俞文豹の

偽撰説は大きな矛盾を暴露しているのである。そこで次に張商英の撰述であるとする方が正しいと思われる根拠をのべておこう。『護法論』で儒仏道三教の教義を詳細に比較した部分がある<sup>⑩</sup>。このことは著者が三教各々に対する豊富なる知識を有したことを物語る。これは別の拙稿で論述したことであるが、張商英は読書人であり、また官僚として秀れた業績を残した教養の高い父や兄を持ち、新法党の政治家として王安石(1021-1086)や章惇らの政治を支持した。彼の政治家としての生涯には多くの起伏、浮沈はあつたが、徽宗朝にはついに丞相になつてゐるほどであるから、豊かな儒教的教養を身につけていたことは言を俟たないであろう。因に彼の著述のうち、現在は散佚して見ることができないが、張無尽集二十三卷などには彼の儒教思想が豊富にみられたであろうと思われる。

張商英が宋代居士のなかで、最も仏教を愛好し、これに深く帰依した人物であることは、曾つて彼の仏教專蹟を考察したとき、明かにしたところである。それ故本稿では彼の仏教が華嚴と禪を中心としたこと、及び彼が多くの仏教に関する文を著わしたことをみの特記し、重複の煩を避けることとする<sup>⑪</sup>。

さらに注意すべき事実がある。彼の家系から政治家を出し、代々読書を好む性向があつた。同時にまた道教的雰囲気をもつていたらしく、そのためか、張商英自身も若い時は道教に深い関心を寄せた。『宋史新編』卷一二一の張商英伝に

張商英字天覺蜀州人、長身偉然、豪視一世、章惇絳制虜夷、狎侮郡縣、商英知南州、著道士服、長揖就坐、惇肆意大言、商英隨機折之。

と云う。仕官しても道士の服を着ていたというから、商英が青年時代に於て道教に対して可成り心酔していたとみとめられる。これによつて彼が早くから宗教に対して鋭敏な感受性を備えていたことを知る。後に彼の妻向氏の感化を受け、これによつて次第に仏教への関心を抱くに至つたと推定される。それ故に彼が数種の道教に関する著書を撰述したとしても何ら不思議ではない。以上張商英の儒仏道三教についてその概略をみたが、これから推しても、『護法論』の三教の調和を主張する論述にみられる多くの卓見は、いづれも張商英が長い間に蓄積した三教に関する知識の集大成であることが知られる。

また『護法論』流布の点から見ても、俞文豹以外には慧洪覺範撰述の説をとるものはない。その主なるものを

挙げるに、まず鄭興徳というひとが「護法論元序」(大正・卷五二・六三七—八)を書いて、張商英の撰述としている。<sup>⑦</sup>これには南宋孝宗の乾道辛卯(1171)六月望日の日付けが入つており、俞文豹が『吹劍錄外集』で偽撰説を主張した理宗の淳祐庚戌(1250)より約八十年前のことである。これを以てしても俞文豹説に作意をみとめざるをえないのである。また俞文豹の偽撰説が出たのち、元代の文人、虞集(1272—1329)が「護法論後序」(大正五二・六四六)を著わし、また同じく元の劉謐がその著『三教平心論』(大正卷五二所収)において、張無尽の撰述したものとして盛に『護法論』の説を引用している。<sup>⑧</sup>更に明代になると、宋濂(1310—1381)が「重刻護法論題辭」(宋學士文集卷二八)を著わし、同様に商英の撰述としている。<sup>⑨</sup>かくて元明に互つて『護法論』の著者は張無尽居士であると信ぜられ、後世の知識階級に広く愛読され、俞文豹の偽撰説を支持するものは一人もなかつたのである。

#### 四

上にのべた如く『護法論』の著者が張商英であることは確実であるが、『護法論』はその標題が示す如く、仏

法の擁護を目的とするものである。故に三教一致や三教鼎立を説き乍らも、仏教の教理が儒道二教の欠陥を補い、しかも二教よりも高次にして深遠なる宗教であることを主張するのは当然である。こういう仏教擁護の論をもし僧侶が強調しても当然のことであつて、何ら不思議なことではない。事實、宋代には贊寧とか契嵩という護法僧があつた。ところが在俗の仏教信者たる張商英が『護法論』を撰述したところに、注目すべき意義がある。しかも贊寧や契嵩の主張には朝廷や士大夫階級に対する遠慮が見られるが、張無忌居士の『護法論』には大胆且つ熱烈な仏教支持の精神が溢れ出ている。既述の如く仏教は宋学の大成に資する点が大きく、名ある宋儒の多くは仏教思想の影響を受けたにもかかわらず、その身分が儒教主義による独裁国家の組織内にあつたために、公的には仏教排斥の立場を主張しなければならなかつたのである。すなわち彼らは陽儒陰仏の立場を堅持している。ところが張商英は陰陽ともに大胆に仏教を支持擁護した。これはまことに注目すべきことである。それでは何故張商英が一般の宋儒と異つて、公然として仏教擁護の論を行つたのであるかという点を考察してみよう。第一は長年に亘つて彼が学仏参禅した結果、遂に仏教の真

髓に触れることができたからであらう。これは彼が

余忝高甲之第、仕至聖朝宰相、其於世俗名利、何慊乎哉、(大正卷五二、六四一)

と云つてゐることによつて明かである。官僚として誰しも一度はなつてみたい丞相の地位にまで登り乍ら、しかも彼はそれを世俗の名利であるとし、これだけで生涯を終えることは慊らないという。彼の政治家としての生涯はあまり恵まれたものではなかつた。特に徽宗朝のとき天子の寵を得た蔡京(1049-1126)が専横をほしいままにし、自分の一族一党の榮達のみをはかり、国家の利益を全く無視して顧なかつた。張商英は蔡京一派とは全く立場を異にした。張商英は丞相に就任して、僅か一年数ヶ月(大觀四年六月-政和元年八月)の後、はやくも蔡京一派のために、その地位から追われるに至つた。その後商英は政界から退き、政和元年(一一七〇)から宣和三年(一一九一)の死歿まで約九年の間は静かに閑居の生活を送り、ひたすら仏教に心を傾けたのである。この『護法論』は彼の晩年に著わされたと推定される。かくて張商英は不遇なる官僚としての生涯を送つた。しかも彼は北宋末期の徽宗朝という頹廢した政治情勢の中に生きた人であつた。それだけに名利の空しいことを切実に

感じたことであろう。仏教の真理に対する信仰は張商英の長い政治的不遇によつて益々強固なものとなつたと思われる『護法論』こそは実にこうした環境のなかで成立したのである。そこには仏教の真理のために何ものも怖れず、官僚としては言をはばかりべきことを堂々と主張している。これらの点から見て、『護法論』の撰述年時は張商英の晩年(1112~1121)であることは明かである。しかも『護法論』が張商英の晩年に著わされた理由として次の事実を挙げなければならない。即ち徽宗の崇道抑仏政策ということである。この事実との関連からみるこ

とによつて、一層『護法論』撰述の時期と本論の目的や意義を明確に理解することができる。

## 五

徽宗は宋の歴代天子のなかで最も特異な存在である。生来芸術の才に恵まれ、ことに帝の山水・花鳥画は高く評価され、やがて風流天子と称せられたほどである。徽宗皇帝が在位した期間(1100~1125)は、蔡京一派が専横を振い、天子自身が、親しく政治を行うということはあまりなかつたようである。元来風流にして芸術家肌の天子であつたから、政治を執ることを好まず、蔡京一派に

とつても天子が政治の外に眼を向けていることは好都合であつたにちがいない。従つて蔡京らが徽宗のこうした性向を積極的に助長したことも想像される。有名な花石綱や万歳山の修築事業はその顕著なものである。徽宗はこうした風流に耽るとともに、他方では自ら教主道君皇帝と号し、深く道教に耽溺した。徽宗と道教との関係は『通鑑長編紀事本末』巻一二七の道学、神霄宮、方士、『宋史』巻二〇徽宗本紀及び『宋史』巻四六二方伎伝の郭天信、魏漢津、王老志、王仔昔、林靈素等諸伝に詳しく見えている。徽宗は芸術的天分に恵まれていただけに、極めて感受性が強かつたらしく、在住期間を通じて、彼に接近してきた数多くの道士達の言説を盲目的に信賴した。中国では、いつの時代でも、宗教が国家権力と切り離すことのできない密接な関係にあつた。三武の法難は天子が仏教よりも道教を好み、道士の言を容れたところに端を発している。徽宗の場合でも道士が帝の側近に侍つてゐることになると、仏教にとつては不利な結果が生ずることは云うまでもない。資料によると、「(大觀二年)三月庚申班金籙靈宝道場儀範于天下」(宋史卷二〇)という語が徽宗の道教外護を宣言した最初のものである。こうして道教を保護すると共に、仏教に対しては、

大觀四年正月に僧を拜することを禁じ、更に二月庚午朔に然頂・煉臂・刺血・断指を禁じ、五月壬寅には僧牒を停ること三年という詔を降し、僧侶の出家得度を三年間停止したのである。この頃から徽宗の崇道抑仏政策が次第に明確となつた。そして特に政和六年林靈素が登場して、いよいよその政策は露骨となつた。「林靈素はもと温州の人なり。少にして浮屠の学に従うも、其の師の答罵に苦しみ、去りて道士となり、妖幻を善くす。淮泗の間を往来し、僧寺に乞食するも、僧寺これを苦しむ」(宋史四六二)と記録している如く、その経歴からして、林靈素が仏教に対して激しい憎惡を抱いていたことは明白である。彼が徽宗の崇道抑仏政策を強く推進した張本人であるといつてよい。彼がまず行つたことは徽宗に天神降臨説を説いたことである。そして政和七年正月には癸丑秘書省奏抛左右街道録院申、恭依聖旨揮揮、將所降道教五宗、再行条具、立為永式、第一天尊之教、以道德為宗、元始天尊為宗師、第二真人之教、以清淨為宗、太上玉晨天尊為宗師、第三神仙之教、以變化為宗、太上老君為宗師、第四正一之教、以誠感為宗、三天法師靜應真君宗師、第五道家之教、以性命為宗、南華真人為宗師、至於上清通真達靈神化之道感降仙聖、

不係教法之内、為高上之道、教主道君皇帝為師、詔依所奏左右街道録院印行(通鑑長編紀事本末卷一二七道教条)

と伝えるように、徽宗は自ら教主道君皇帝と号し、道教の神位についたのである。それまではただ道教を外護し、仏教を抑圧する程度であつたが、いまや教主道君皇帝となつた以上、当時道教よりも遙かに優勢であつた仏教を敵視したことは当然である。かくて道観のない州には寺を廢してこれを觀に当て、あるいは道教典籍の整備増補につとめ、<sup>⑤</sup> 仏教典籍を焚棄したりした。一方で道教々団の拡充につとめるとともに、他方では仏教に対する圧迫を厳しくしたのである。そして宣和元年には

春正月乙卯、詔仏改号大覺金僊、余為僊人大士、僧為德士、易服飾、称姓氏、寺為宮、院為觀、改女冠為女道、尼為女德(宋史卷三二)

という詔にみゆる如く、徽宗の抑仏政策はその頂点に達した。この詔については『通鑑長編紀事本末』一二七道教の記載がもつと具体的である。すなわち

宣和元年正月乙卯、手詔、応寺院屋宇田産常住一切、如旧永不改革、有敢議者、以違御筆論、其服飾其名称其礼其言並改從中国、仏号大覺金仙、余為仙人道士之

号、僧称德士、寺為宮、院為觀、即住持之人為知宮觀  
事、不廢其教、不害其礼而已、念四方万里之遠、其徒  
之衆、不悉茲意、可令每路監司一員聽其事、郡守僚佐  
召集播告、咸使知之、

とある。これによると、徽宗の行つた宣和の崇道抑仏は  
非常に奇異なるものといわなくてはならぬ。なぜならこ  
の詔は一応、外来宗教たる仏教を中国化するというので  
あるから、中華主義という大義名分の上に立脚すること  
はうなずけるとしても、寺院およびその一切の財産をそ  
のまま、道教の宮觀に転属すべしとか、仏や菩薩の称号  
を道教風に改め、また仏教の僧侶を德士と改称せしめよ  
うとした点は、むしろ徽宗の抑仏策が不徹底であり、そ  
こに帝の優柔不断な性格が窺えるようである。『通鑑長  
編紀事本末』の記載はさらに正月中に徽宗が幾度も降し  
た詔を記録しているが、何れも右の詔と大同小異である  
から一々論及しないことにする。さてこのようにみてく  
ると抑仏が不徹底であることは徽宗の道教信仰の程度が  
それほど深いものではなかつたのではないかという疑問  
を生じてくる。『宋史』の伝えるところでは翌宣和二年  
には次々に復仏の令が出された。このことは『通鑑長編  
紀事本末』巻一二七方士に

宣和元年十一月壬申放林靈素歸温州

と云つている事実と密接な關係がある。既述の如く、林  
靈素は徽宗に対して、天神降臨を説き、天子をして教主  
道君皇帝と号せしめた。宣和元年正月の詔も、恐らく林  
靈素の勧請によると思われる。それでは何故に宣和元年  
正月の詔を出して十ヶ月後に、にわかに林靈素が宮廷か  
ら追放されたかという点、『通鑑長編紀事本末』は右の  
記事の後に続いて、「楊氏編年」によつて次の如く云つ  
ている。

楊氏編年、十一月放道士林靈素歸温州、靈素温州、善  
妖術輔以雷公法、常往来不遑於宿臺淮泗乞食諸寺、羣  
僧薄之、至楚与惡少相毆擊、訟至府庭、通判石冲聞之  
喜其輕便便捷、脱之置於館、問吐納燒鍊飛昇之術、携  
至京師、引謁蔡京、致見上、靈素因大言謂、上夷長生  
大帝君、蔡京乃左仙伯、靈素乃褚慧、於是上喜之、建  
宝籙宮於京城、創神霄宮於天下、置道學官、改寺院僧  
尼、至是京城太水道靈素禳之不驗、又嘗衝太子節、不  
避太子繫之訴於上、上遂厭之逐去

これより推すと、宣和元年正月の詔の直後に主都開封が  
水害に見舞われたので、帝は靈素に命じて祈禳させたが、  
少しも効驗があらわれず、徽宗の期待を裏切つた。また



林靈素が皇太子に対して不敬な行爲をしたことがあつたので、徽宗の心証を害つたらしい。林靈素はかつて僧であつたとき、彼の師匠や寺僧から蒙つた笞罵や侮辱を忘れることができなかったが、宣和元年正月の詔によつて積年の恨を晴らすことができたにちがいない。けれどもその勢に乗じた林靈素の行爲には相当思ひ上つた点多々あつたであらう。これによつてさすがに道教好きの徽宗といえども、靈素の目にあまる不遜な行爲に対して悪感情を抱かずにはいられなかつた。これが林靈素の失脚した最大原因であると思われる。

以上徽宗の崇道抑仏についてみたのであるが、徽宗の崇道抑仏は彼自身の性格が弱かつたために、道士達の強い要請を却けることができなかったために起きたことであつて、この抑仏は天子自らの意志というよりは、彼を取り巻く道士達の仏教に対する私怨や競争意識に起因するといつてよい。それ故徽宗の抑仏には三武一宗の法難にみられるような天子の強固な信念があつたわけではない。林靈素追放直後に仏教の復興を許したことがそのことを物語つてゐる。しかしとにかく徽宗がこうした崇道抑仏を行つた時期に、張商英が『護法論』を著わしたのである。『護法論』では、張商英は当面の徽宗の崇道抑

仏政策に対して格別の非難をしてはいないが、過去の史実を挙げて抑仏の不当なることを論じている点は、遠まわしに徽宗一派の抑仏政策に対抗しようとする意図を示すものと考えられる。

## 六

さて『護法論』はしきりに三教の調和を主張しているが、その根拠は何であるかが問題である。張無尽居士の思想遍歴から推定すると、これらは彼が深く親しんだ華嚴教學からきているとみなくてはならないであらう。曾つて、野上俊靜教授が「金李屏山攷」に於て、李屏山の『鳴道集説』の三教調和論が華嚴の円融無礙の教學によることを論証された。このことが張商英の場合にも全く符合することは興味深い。

なお俞文豹が何故、『吹劍録外集』で『護法論』の著者を慧洪覺範としたかというに、『四庫提要』卷二二一吹劍録外集の項の説は興味深い。

吹劍録持論偏駁、多不中理、今別存其目、此集卷末載二詩、詩前題詞有絶筆、期録之語、蓋其晚年之所作、故學問既深、言多醇正、其記道學黨禁始末甚詳、所稱韓范欧馬張呂諸公、

すなわち『吹劍録外集』は俞文豹の晩年の作で『吹劍録』著述時代にくらべて、その学問は深く、言も多く醇正となり、俞文豹が称讃するのは、韓愈、范仲淹、歐陽脩、司馬光、張横渠、呂公著など宋学の代表的な儒者たちであつた。この説はまことに首肯に値するものである。この見解から俞文豹の『護法論』覚範撰述説の根拠を推定するに、『護法論』がもともと文豹の尊敬する韓愈、歐陽脩らの排仏説に反論を加えたものであるから、文豹にとつてはきわめて厄介な存在であつたにちがいない。彼にとつて儒教の立場にあるべき士大夫張商英が『護法論』を撰したとするよりも、張商英と三十年間もの長きに互つて親交があつた僧慧洪覺範に仮託した方が好都合であつたにちがいない。これが俞文豹の見解の成立事情ではなかつたかと想像される。若しそうでないとすれば『吹劍録外集』よりも先に著わしたと思われる『唾玉集』の張商英撰述説を覆えた理由が理解できないからである。こうした事情に当時の思想界の動向の一端を窺うことができるのではないだろうか。すなわち当時は朱子学が全盛であつたにもかかわらず、一方では『護法論』が盛んに読まれていたという事実があることは注目すべきである。

註① 大正藏經卷五二、說郛卷八五所収。

② 仏書解説辞典望月仏教大辞典等。

③ 陳垣「仏教史籍概論」一七頁参照。陳垣氏は護法論の撰述者を問題とするとともに、張商英の禪学をも疑問視しているが、陳垣氏の所説に直ちには賛成しえない。

④ 武内義雄「中国思想史」二九六―二九八頁、守本順一郎「朱子学の歴史的構造(上)」(思想三五四号)参照。

⑤ 大正藏經卷五二、六三九a

⑥ 大正藏經卷五二、六三八cに「維摩經偈云、經書呪禁術・工巧諸伎芸、尽現行此事、饒益諸群生(中略)一切煩惱、皆是菩提、一切世法、無非仏去(法?)。若能如是、則為在家菩薩、了事凡夫矣」とみゆ

⑦ 大正藏經卷五二、六四〇b c

⑧ 吹劍録一卷(重校說郛弓第二七、說郛齋叢書庚集所収)

吹劍録統集(說郛卷第二四所収)

吹劍録外集一卷(知不足齋叢書第二四所収)

唾玉集(說郛卷第四九、重校說郛弓第二三所収)

静夜録一卷(五朝小説宋人百家小説偏録家、重校說郛弓第三八所収)などがある。

⑨ 「四庫提要」三七吹劍録一卷、同一二一吹劍録外集、同一四三静夜録一卷の各項参照。

⑩ たとえば大正藏經卷五二、六四三a b

⑪ 拙稿「宋の張商英について―仏教関係の事蹟を中心として」(東方学第二十二輯)において張商英の生涯を、特に仏教を中心として考察を加えておいた。同誌五八―九参照

⑫ 前掲拙稿に於て既に論じた如く、張商英は新法党の王安石、章惇らに起用され、新法党系の人であつたが、王安石なきあとは極めて不遇であつた。『通鑑長編紀事本末』卷一三一「張商英事蹟崇寧三年の条に」、「(八月)辛酉、臣寮言通議大夫新知亳州張商英、作為謗書、肆行誣詆、固宜更加誅責、置之元祐籍中、昭示無窮之戒及商英所撰嘉禾篇并司馬光祭文等、乞下有司、模印頒示、四方益明、陛下紹述先猷之意、以懲為臣懷武者、詔張商英改差知蘄州」とみゆ。すなわち張商英が「嘉禾篇」(今は散佚か)を著わしたことを口実として、張商英がその政策に極力反対していた旧法党の首唱者司馬光と共に元祐党籍に入れられた。「金石萃編」所収の元祐党籍碑に張商英の名はみえている。この時期は商張英の官吏として最も不遇だつた。なお楊仲良の「通鑑長編紀事本末」張商英事蹟には、商英に対する当時の批判を豊富に輯録しているが、この頃の政界の状況からして、新旧両法党人が、激烈なる感情論を吐露する傾向があるから、厳密な資料吟味なしにその説の全てをとることはできない。更に「張商英事蹟」大觀三年の条に「十二月戊子提學玉局觀張商英為竜岡閣學士、知杭州乘軼赴閩、詔皆閩哲廟奏錄、見商英、紹聖初力排元祐姦惡、迹狀甚明、具載信史、昨崇寧初、止緣与大臣議論不合、罷政迹、其本心實非朋党、雖已出籍、自今仍不得依元祐党籍人、体例施行、并有是除命」と記されており、張商英は元祐党(旧法)人でないことがみとめられたのである。この党籍の事件をもつてしても、如何に当時の政界が乱れ、不安定な状態で

あるかが知られる。

⑬ 晁公武「郡齋讀書志」卷十九、及び拙稿六五頁参照

⑭ 拙稿参照

⑮ 拙稿六十五頁参照。

⑯ 三才定位図(道藏調下、六八)通鑑長編紀事本末一三一張商英事蹟大觀四年十二月の条参照。

金錄齋三洞讚詠儀三卷(道藏島上・一六二)

金錄齋投簡儀一卷(道藏体下・二六七)

黃石公素書注(道藏虧下八四九)郡齋讀書志卷十一参照。

⑰ 無尽居士深造大道之淵源・洞鑑儒釈之不二といつてゐるまた乾道七年にこの元序が出来たことから護法論の初刻はこの頃と推定される。

⑱ 無尽居士得兜率悅公不伝之旨、以大弁才、縱横演說猶慮去仏既遠、邪見者多、不知向上之宗、妄有謗訕之語、此護法論之論所由作也とある。

⑲ 無尽居士作護法論曰、儒療皮膚、道療血脈、仏療骨髓(大正卷五二、七八一C)とか無尽護法論曰人有極聰明者、有極愚魯者(七七九〇C)の如きである。劉謚の伝は不詳であるが、張商英の護法論に啓発されてかれは「三教平心論」を著わしたとみられる。

⑳ 衢州天寧住持端文禪師、不遠千里來請曰、吾宗有護法論凡一万二千三百四十五言相伝、宋觀文殿大學士太保張天覺所撰とみゆ。

㉑ 牧田諦亮「僧史略の世界」(印度學仏教學研究二一一)、同じく「君主独裁社会に於ける仏教々団の立場上下」(仏

教文化研究所収を参照。

②⑨ 宮崎市定編「世界の歴史6 宋と元」二三七—八頁参照。

②③ 外山軍治「徽宗と中国の文化」(書道全集十五)参照。

②④ 宮崎市定編「世界の歴史6 宋と元」二三九—二四一頁参照。

②⑤ この詔の後に、「(政和七年)四月庚申……朕乃晏天上帝元子為太霄帝君、觀中華、被金狄之教、盛行焚指、煉臂捨身以求正覺朕甚憫焉(通鑑長編紀事本末、一二七)と記録しているから、徽宗が古來行われた捨身をば、中國古有の孝教精神にそむくものとしてきらつたことが知られる。けれどもこの事實は徽宗が詔を下さねばならなかつたほど捨身が民間で流行していたことを物語るとも云いうる。

②⑥ 徽宗自身も御注西昇經三卷(道藏纂上中三四六・三四七)御解道德真經四卷(才下三五九)、靈寶無量度人上妙品經符圖三卷(調上・六七)御注冲虛至德真經義解六卷(作下・四六〇)があり、更に郡齋說書志卷十五医図類に聖濟經十卷を徽宗御製としている。

②⑦ 林靈素の失脚については、賓退録(学海類編第十一帙)に非常に詳しくみえてゐる。

②⑧ 詳しくは塚本善隆「道君皇帝と空名度牒政策」(支那仏教史四—四)、荒木敏一「宋代科場に於ける仏誓の禁」(塚本頌寿記念仏教史学論集)を参照されたい。

②⑨ 前掲拙稿六一頁参照。

③⑩ 野上俊静著「遼金の仏教」二一八頁参照。

③⑪ 宮崎市定編「世界の歴史6 宋と元」三四六—三四九参照

## 大谷学報 第四十一巻 第四号

第二十願の分位……………稲葉秀賢

『二尊大悲本懷』について……………雲村賢淳

「伊勢伝考」……………岡崎知子  
—宮仕時代を中心に—

非神話化の意想における  
問題の所在……………大屋憲一

浄土論註法身説の背景……………三桐慈海